

国境を越えるネットワークとエスニシティの動態 ——雲南省・シプソーンパンナー, タイ・ルーの事例から——

長谷川 清*

Cross-Border Networks and Dynamics of Ethnicity: A Case of the Tai Lue in Xishuangbanna Dai Autonomous Prefecture, Yunnan Province

HASEGAWA Kiyoshi*

This paper examines the construction of ethnic identity and the expression of ethnicity among the Tai Lue of Xishuangbanna Dai Autonomous Prefecture, Yunnan province, by focusing on the dynamics of inter-ethnic relations between the Tai Lue and the Han since the establishment of the People's Republic of China. After the liberation, all factors in Tai Lue society considered as feudalistic were thoroughly dismantled and reorganized in a socialist mold. As a result of process, the Tai Lue faced a great crisis in maintaining their cultural identity. In addition, the radicalism during the Cultural Revolution further severely suppressed their ethnicity. However, the development of the market economy since the 1980s, including the extension of inter-regional linkages and cross-border networks, has brought new possibilities in the promotion of Tai Lue ethnicity.

Key word: Cross-Border Networks, Inter-ethnic relations, Ethnicity

I はじめに

本稿は、中国雲南省の西双版纳傣族自治州（以下、シプソーンパンナーとする）に居住するタイ・カダイ語系のエスニック・グループ、タイ・ルー Tai/Dai Lue における民族的アイデンティティの構築およびエスニシティの表出をめぐり、マクロな分析視角と枠組みから検討し、その現代的位相を明らかにすることを目的としている。¹⁾

* 聖徳学園岐阜教育大学； Gifu University for Education and Languages, 2078 Takakuwa, Yanaizu-cho, Hashima-gun, Gifu 501-6122, Japan

1) 多民族国家・中国を構成する「民族」としての傣族の「下位」集団となった中国領内のタイ・ルーの表記については、傣族によって代替したり、タイ・ルー族とせず、東南アジア側のタイ・ルーとの比較を図るために、彼らの自称そのまま記述していく。ただし、中国側の「少数民族」として、国家から定義された「民族」としての状況を考慮する必要がある場合、正式な「民族」名称としての傣族を用いる。なお、本稿で用いる資料は、筆者がこれまで継続してきた西双版纳傣族自治州・景洪地区での現地調査によって得られたものである。

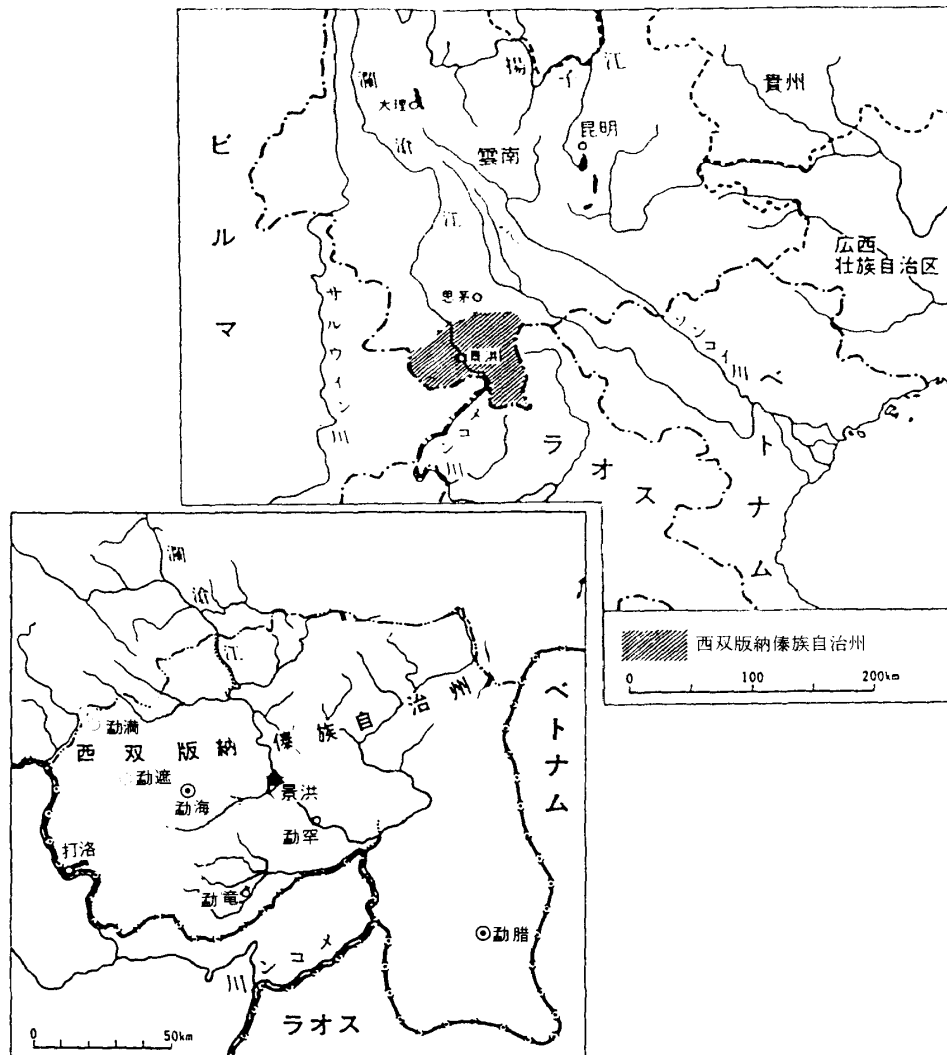


図1 西双版纳傣族自治州の位置

これまで繰り返し説かれてきたように、タイ系諸族は、中国雲南省から東南アジア大陸部、インド東北部のアッサム地方にかけて広く居住し、地域的にも多様に分化する数多くの「下位」集団から構成される。タイ系諸族の地理的分布にみられるこうした拡散性は、彼らが「溪谷移動民」として歴史的に経験した移動分散過程の結果と解釈できるが、その場合、同質的な基層文化、上座仏教という大伝統、汎タイ族的な集団意識の存在などが無批判に共通の文化要素として扱われてきたという経緯がある。だが、それぞれの国民国家における彼らの政治的地位や帰属状況、エスニシティの表出様式などは、きわめて偏差にとむと同時に複雑な関係性のなかにおかれている。

中国の場合、社会主義体制への移行後、国内に居住する多種多様なエスニック・グループに対し、多民族国家を構成するための基本単位としての「民族」(Minzu)に認定し(民族識別工作)、中国共産党の国家統合の理念に抵触しない範囲で彼らの自治権を認めた(民族区域自治)。そ

の結果、タイ・ルーは「少数民族」としての傣族(Dai Nationality)を構成する「下位」集団となったが、国家／中国共産党側が進めた民族政策や社会改革は、タイ・ルーをめぐる政治的、経済的、社会的、あるいは民族関係論的文脈を大きく変容させるにいたっている [cf. 彭 1956；西双版纳傣族自治州概況編写組 1986]。

中国領内に居住するタイ・ルーのエスニシティの表出とその動態を検討するにあたり、出発点となるのは、タイ北部のタイ・ルー農村で調査を行い「誰がルーか？」を人類学的な議論として問題提起した、モアマンの先駆的な研究である。モアマンはこの研究のなかで「ルー」という民族名称的なラベルが、タイ国という国家的文脈のなかで状況に応じて選択された結果による自己表出の一形態であるとし、他者との相互関係や社会的文脈によってはタイ人、北部タイ人（コン・ムアン）という、異なった自己呈示の選択肢が併存していることの意義を詳細に検討した [Moerman 1965]。

モアマンが論じたタイ・ルーの事例とその理論的な含意は、エスニック・グループのアイデンティティの可変性、民族的境界の動態、主観的な帰属意識などに関心を示すエスニシティの動態についての人類的な議論の俎上でしばしば参照されてきた。だが、帰属するそれぞれの国家のなかで多様な展開をみせるタイ系諸族のエスニシティ表出の議論として、民族誌的事実関係とあわせて吟味されることはほとんど行われなかったといってよいだろう。近年、東南アジア大陸部の国境地帯の流動化とボーダレス状況、国民国家システムを越える地域的秩序の再生、グローバル化というマクロな変動過程の進行のなかで、複数の国家体系に跨りトランスナショナルな性格をもつエスニック・グループへの問題関心が全般的に高まる傾向をみせている。体制の異なる国家内に布置されるタイ系諸族はそうした議論を深める格好の対象であり、エスニシティの表出様式とその現代的位相をめぐる比較研究の意義が強調されるにいたっている [cf. Wijeyewardene 1990；林 1996]。モアマンが先鞭をつけたタイ・ルーについては、タイ国内の状況ばかりでなく、むしろそれを相対化する意味で、中国やラオスに居住するタイ・ルーの調査研究や比較検討が積極的に進められるようになっていく。²⁾

なかでも、カイズはモアマンの出発点に立ち返り、その問題点を指摘する一方、国民国家とタイ・ルーの相互関係を再検討し、タイ、ラオス、中国という3つの相互に異なった国家的文脈のなかで比較を試みている。その結果、これらの国家におけるタイ・ルーとしてのエスニ

2) 例えば、シブソーンパンナーから北タイへの移住の歴史的過程を詳細に検討し、ムアンの守護霊祭祀を国民国家的文脈のなかで検討した調査研究 [馬場 1993；1995；1996a]、西双版纳傣族自治州成立以前のシブソーンパンナーの王国的政体を「エスニック・ステイト」(Ethnic State)と概念化し、タイ・ルーのエスニシティの歴史的変遷を中国歴代王朝による土司制度との関係で検討した研究 [Hsieh 1989；1995]、上座仏教の断絶・再生とタイ・ルーのエスニシティの関係を論じた研究 [Peters 1990] などが現れている。筆者もこれまで得た資料にもとづき、以下の予備的な考察を試みている。拙稿 [1990；1991a；1993a；1993b；1995] を参照。また、謝 [1993] もタイ・ルーのエスニシティを多方面から検討しており、参考になる。

ティの表出様式は、それぞれの国民文化のありようにより大きく規定され、帰属する国家内部の文脈と状況のなかで多様な意味を帯びている点、タイ・ルーとしての民族的アイデンティティはそれぞれ異なった方法で再構築されている点などが明らかにされた。また、ローカル、マーケタブル、トランスナショナルという異なったタイプのアイデンティティの類型化を主張している [Keyes 1993]。

ところで、この地域に居住するエスニック・グループの人類学的研究を回顧する時、国民国家とエスニック・グループ、あるいは少数民族とのかかわりをめぐる諸問題についての幅広い議論が、クンシュタッターらを中心にすでに1960年代に開始されていた点に注目できよう。その際、彼は個別のエスニック・グループを包摂する関係論的文脈や動態論的過程を重視するリーチの観点 [Leach 1954] を継承し、エスニック・グループを他から区別して独自の集団たらしめている要素は、個別的な言語、文化、生態学的位置、宗教、文字、政治的發展の程度などではなくて、支配的な多数派集団との関係のパターンであると主張していたのである [Kunstadter 1967:42]。

この基本的な分析の枠組みは、地理的特性、生態系、多民族的状况、エスニック・グループの垂直的分布と政治・社会統合の諸類型などの面で共通点の多い中国南西部の多民族的地域社会、とくに雲南省の国境地帯のエスニック・グループを対象とする場合には十分応用が可能である。だが、支配的な多数派集団との相互関係という場合、その状況は東南アジア大陸部よりも複雑な形勢となっている点にも同時に注意を払う必要がある。すなわち、中華帝国の政治的秩序の伝統やその影響、政治的にも、経済的にも、また文化的にも決定的な影響をもたらした圧倒的多数派としての漢族という要因、あるいは社会主義体制への移行後に実施された「少数民族」をめぐる諸改革や政策的措置などは、中国国内における「民族」のエスニシティの表出それ自体に大きく関与する要因であり、その意義をめぐる人類学的な検討の重要性が主張されているからである [cf. Hsieh 1986; Lemoine 1989; Wu 1989]。

以下では、このような論点をふまえつつ、中華人民共和国の成立以降のシブソーンパンナーにおける社会主義化と民族政策の展開過程を具体的にたどった後、タイ・ルー社会の構造的変動とエスニシティ表出の変遷過程を、とくに多数派として漢族との民族間関係を軸に検討していく。その際、まず分析作業の前提となる重要な点は、「漢族」といってもその内容はきわめて多様だということ、また、タイ・ルーとのかかわり方も時期的に内容面で大きな相違があり、漢族とタイ・ルーの民族間関係は一樣な均質状態にあるものではないという点である。後述するように、国营農場の建設者として中央政府主導で組織的な移住が図られた1950年代中期から文化大革命の終了時までの、社会主義的な集団化政策と「階級闘争」が追求されていた時期の両者の関係と、改革開放政策の実施により自発的な国内移住が可能になった80年代以降のそれでは、内容面、形式性のいずれにおいても大きな違いがあるのは当然であろう。また、90年代

に入り顕著な傾向となりつつある国境貿易の担い手としてネットワーク化の推進役、あるいは観光客としての漢族は、シブソーンパンナーにおける民族間関係に新しい要素を付加している。これら多数派集団の動向は、いずれも少数民族側に大きな影響をあたえてきたが、タイ・ルーにおけるエスニシティ表出をめぐる力学を内在しているはずである。このような見通しにより、シブソーンパンナーにおけるタイ・ルーの民族的アイデンティティとエスニシティ表出の動態を検討していくことにする。

II 自治州の形成と「民族」の創出

1. タイ・ルーとシブソーンパンナー王国

タイ・ルーは、ユアン（コン・ムアン）、クーン、シャン、ラーオなどのタイ系諸族と同じく南西タイ諸語を構成するが、本拠地のシブソーンパンナー以外にはミャンマー・シャン州、北タイ、ラオス北部などに居住する。中国と異なった国家的文脈に属するようになったタイ・ルーとそうでない状況のそれでは、その後の国家的過程で自己意識の形成やエスニシティの表出においていかなる違いがみられるかは検討に値するが、タイやラオスの領域内に居住するタイ・ルーは、18世紀末のカーウィラによるランナー王国再興の入植捕虜、雲南系漢人の圧迫、英仏列強勢力の東南アジア大陸部への侵入や「国境」画定期の政治・社会変動、王権支配体制から国民国家への移行、社会主義化にともなう社会的混乱などを経験し、エスニック・グループ化したという経緯をもつ。彼らは様々な歴史的経緯や要因により、王国体制下のシブソーンパンナーから東南アジア側に移住したという歴史的記憶や自己意識を今日なお根強く保持している〔馬場 1996b:131-132〕。

こうした移民的状况を歴史的背景にもち、しだいに国民国家的過程に編成されるタイ・ルーとは異なり〔cf. 馬場 1996a〕、中国領内のシブソーンパンナーの範囲に居住するタイ・ルーは、国家側から定義された「民族」(Minzu)としての傣族を構成する「下部」集団の一つとみなされており、社会主義体制下のエスニック・グループとして国家主導の成形化過程のなかにおかれている〔cf. Hsieh 1995; 長谷川 1995〕。ところで、シブソーンパンナーのタイ・ルーにとり、「ルー」を自称する根拠は、想念されたノスタルジーとしての歴史的記憶というよりも、自治州の形成以前に長期にわたって存在した王国組織の主体を担う多数派集団であるという政治的な含意を多分にともなった自己意識に由来する。³⁾

さて、シブソーンパンナーには、山間盆地を基盤としたムアンが多数存在する。「シブソーンパンナー」の名称自体が王国的政体の編成様式を表し、シブソーン（12の意味）からなるパ

3) こうした心理的傾向は、かつての政治的エリートの系統を引く民族幹部や知識人の間には顕著にみられる。

ンナー（「1,000の田」という意味で、王国の領域単位）という貢納単位に拠ったものと解釈されている。ムアンは盆地面積と耕地規模の大小により政治勢力としての優劣を生み出していたが、各ムアンの農民村落はムアンごとの首長権力による専制的な統治支配を受けた [Kato 1994]、同時にムアンにはその創建にかかわる守護霊や起源伝承が存在し、タイ・ルー内部におけるムアンを単位とするローカルな帰属意識の差異を生み出す装置として機能した。⁴⁾ シブソーンパンナーの王権は「王」・ツァオペンディンを頂点に編成されていたが、「王」は王国周辺の政治勢力よりいくつかの称号を与えられ、王国もそうした勢力の政治的作用を強く受けた。とりわけ、中国の歴代王朝による土司制度とその枠内にあることの証としての「車里宣慰使」という政治的状況は、タイ・ルーのエスニシティの表出様式に大きく影響したのである [cf. Hsieh 1989; 加藤 1997]。

タイ・ルー語の史料にもとづけば、シブソーンパンナーという王国的政体は、ムアン・ルーと称された。タイ・ルーという名称の発端はこの点に関係している。12世紀後半に建国されて以来、北部タイのランナー王国（タイ・ユアン）、ミャンマー・シャン州のケントウン王国（タイ・クーン）、ラオス北部のランサーン王国（ラーオ）などのタイ系諸王国と密接な相互関係を保持してきたという。14世紀後半から15世紀前半にかけて、ランナー王国からケントウンあたりを中継してスリランカ大寺派の上座仏教がシブソーンパンナー王国に伝わり、王権と上座仏教との結びつきも強固になった。16世紀前半には王国としての支配領域、および周囲のタイ系諸王国との政治的境界もさだまり、シブソーンパンナー王国のタイ系住民の間にタイ・ルーとしての自己意識がしだいに形成されていったのである [刀 1989; 劉 1993; 朱 1993]。

シブソーンパンナー王国は中華的世界秩序の周縁にあり、歴代の中国王朝による土司支配を受けた。16世紀後半にはビルマでの覇権を確立したタウングー王朝へも従属し、中国とビルマという2つの政治権力からその政治的地位と権威、支配の正当性を賦与される体制となった。この時に挙行された「王」の即位儀礼は重要である。安居入りと安居明けの時期に王都で盛大に行われ、地方のムアンの首長もふくむシブソーンパンナー王国の全官員による「王」への拝謁と忠誠の確認、王都の寺院への参拝、全官員の政治的役職の任命にかかわる儀礼として、それ以降の王権儀礼の範型となった [刀 1989:244-250; 長谷川 1991b:398-403]。なお、このような二重の従属状態は、タイ・ルーの政治的レベルにおけるアイデンティティやエスニシティの表出様式に大きく影響したが、それは時代的な変遷はあるものの、東南アジア大陸部の植民地化、「国境」の画定などにより中華世界の政治秩序が崩壊するまで基本的に持続したと考えられる。

4) シブソーンパンナーの各ムアンには、ムアンの守護霊（ピー・ムアン）が多数分布する。ムアン創建にまつわる数々のエピソードや民族間関係についての語りはそれぞれのムアンの地域性や独自性の歴史的根拠となってきた経緯がある。長谷川 [1993a]、朱 [1996]などを参照。

2. タイ・ルーと国民国家

19世紀後半、中国雲南省と東南アジアを分ける「国境」画定が進行していく。それはタイ系諸王国にとって、それまでの歴史的交流圏としての地域的まとまりを分断するものであった。シブソーンパンナー王国と交流のあったタイ系諸王国は、それぞれ新たに発足した植民地体制や国家領域のなかに編入された。タイ・ルーなどのタイ系諸族は、それぞれ異なった「国民」としての成形化過程のなかにおかれていく。シブソーンパンナー王国の場合、中国王朝による直接支配への転換は、メコン川の以東地区では18世紀前半から始まっていた。東南アジア大陸部の植民地化に危機感を募らせた清朝政府は、国境地帯のタイ系土司の支配地域の直接統治をめざしたが、シブソーンパンナー王国のウ・ヌア、ウ・タイ地方はフランス領インドシナ連邦に編成されてしまった。だが、それ以外の部分は正式に中国の領土として残された〔傣族簡史編写組 1986:122-126〕。

中華民国が成立すると、すでにシブソーンパンナー王国の内部抗争を抑える目的で入っていた柯樹勲の率いる軍隊は、そのままシブソーンパンナーに駐留し、柯も普思沿辺行政総局（1913年）を設置した。彼はシブソーンパンナーの全域を8つの行政区に分けて近代的な地方行政体系への転換を図った。その後、行政区から県制に改めたが、さらに普思沿辺殖民総辦（1936）という官署に切り換えられた。この中央集権的な国家体系の下部機構への編入過程で、タイ・ルーの王国組織は大きく制限を受けることになったが、国家側は王権そのものを否定することせず、従来通りにムアンを支配するタイ・ルーの土司と漢族官僚による二重の政治機構が併存するという状況であった〔刀 1988〕。

だが、中華人民共和国が成立し、「民族区域自治」の原則が公布されると形勢は大きく変化する。西双版纳傣族自治区（1953年1月設置、56年に西双版纳傣族自治州に変更）の成立にともない、土司制度の下で生き延びてきた王権や王国組織を「封建領主制」として否定、同時に国家側の「民族」認定工作により、タイ・ルーは雲南省の他の地区のタイ系民族と一つに合体化され、傣族を構成することになった。それまでシブソーンパンナーにおいて政治的支配を握り、大伝統としての上座仏教を背景に文化的にも優位性を誇示した多数派・タイ・ルーは、巨大な多民族国家としての中国のなかで「少数民族」化され、山地居住の非タイ語系集団から創出された哈尼族、拉祜族、布朗族などの諸「民族」とともに、自治州の構成単位となったのである〔cf. 王 1993；余 1996〕。

この転換過程でタイ・ルーのエスニシティが政治的な自己主張となって国家側に表出された点は重要である。自治州を発足するにあたり、新たに「民族」を形成することになった諸集団とタイ・ルーの間では、歴史的に蓄積されたローカルな政治的文脈における複雑な民族間関係が調整されていったが、タイ・ルーは「シブソーンパンナー」という領域名称の継続を強く主張し、その結果、シブソーンパンナーを漢字で表記した「西双版纳」が自治州の正式名称となっ

た。⁵⁾ これにより、シブソーンパンナーという地域観念がタイ・ルーとしての民族的アイデンティティの拠り所となっている事実が確認されるが、こうした政策的対応とは対照的に、東南アジア側のタイ系諸族との対外的関係や相互交流の機会は大幅に縮小し、彼らとの対面的交流や相互関係のなかでタイ・ルーを自認する客観的状况が消失していったのである。

Ⅲ シブソーンパンナーにおける社会変動と民族間関係

1. 人口変動と漢族—タイ・ルー関係の変容

自治州成立以降のシブソーンパンナーにおけるタイ・ルーのエスニシティの変遷過程を検討するにあたり、同地区の多民族的状況と人口動態について一応の理解を得ておく必要がある。1995年度の人口統計によれば、シブソーンパンナーの総人口は約81.8万人で、漢族21.2万人〔25.9%〕、傣族28.5万人〔34.8%〕、傣族以外の少数民族32.1万人〔39.3%〕という状況だが〔沈 1996:971〕、中華人民共和国が成立した1949年の時点では、シブソーンパンナーの総人口それ自体が約20.1万人と数値的にはかなり低い段階にとどまっていた。その内訳は漢族0.5万人〔2.5%〕、傣族10.5万人〔52.1%〕、傣以外の少数民族10万人〔45.4%〕という状況であり、漢族の人口比率が1980年代以降の数値と比べ、極端に低かった点がこの時期の特徴である。しかし、その後の人口増加の経過をみると、1956年には総人口約25.9万、漢族1.8万人〔6.9%〕、傣族12.9万人〔49.8%〕、その他9.9万人〔38.2%〕へと推移している〔劉・胡 1990:139-143〕。

この統計資料より明らかな点は、西双版纳傣族自治州が発足した段階では、中華民国期の人口構成状況と大差なかったこと、⁶⁾ 傣族は総人口の過半数をしめる多数派集団であり、漢族はシブソーンパンナーの域内ではまだ少数者にすぎなかったことである。しかし、この傾向はそれ以降大きく変化する。1950年代後半からシブソーンパンナーではゴム栽培を主とする国営農場の建設が始まり、湖南省などの中国内地出身の漢族農民が大量に移住したことを契機に、文化大革命期には下放青年の流入などが続き、漢族だけが突出した人口増加の過程をたどるのである。⁷⁾

5) 自治州の設置に際し、新たに「民族」に認定されたエスニック・グループの間では、自治州の名称問題、政府委員・民族幹部の配分、自治州首府の所在地などをめぐる対立が表面化した。その経緯については、王連芳〔1993〕、中共西双版纳州委党史征研室〔1996〕などを参照。

6) 中華人民共和国成立以前のシブソーンパンナーの漢族人口は総じて少なかったようであり、大半は主として乾季に茶・アヘンなどの交易、日用雑貨品の販売のために訪れた。1920年代以降、「招墾」の号令のもとで、中国内地の手工業者、農民が入植したといわれるが、実数は不明である〔劉・胡等 1990:172-174, 178-179〕。

7) 中華人民共和国成立後におけるシブソーンパンナーの漢族移民と少数民族社会の変動過程については、李常林〔1993〕、管野〔1995〕などを参照。管野は景洪地区（ツェンフン）での現地調査をふまえ、1980年代以降における漢族の出稼ぎ移民がタイ・ルー社会に与えた影響を詳しく論じている。

その結果、1982年に全国的規模の人口調査が行われると、シブソーンパンナーの人口構成は、総人口約64.6万人、漢族18.6万人〔28.8%〕、傣族22.5万人〔34.9%〕、その他が23.5万人〔36.3%〕という段階に達しており、全体的な人口増加が始まった1950年代半ばと比べ、諸「民族」の人口比率には大きな変化が生じていたのである〔劉・胡 1990:140〕。この間の人口増加率は傣族1.9倍、その他の少数民族2.5倍、漢族10.3倍である。このうち少数民族の人口増加については、外部からの人口流入ではなく自然増加の結果とみなしうるのに対し、漢族のそれは明らかに人為的要因、すなわち国家主導のシブソーンパンナーへの漢族移住政策がもたらした事態である〔李 1993:104〕。

なお、これ以降の人口動態は、政府側の発表する統計資料によるかぎり、ふたたび緩慢な上昇傾向へと戻っている〔征 1993:24-29〕。諸民族の人口構成が比率の面で傣族、それ以外の少数民族、漢族がそれぞれ総人口の3分の1を構成し、民族間関係が人口管理の面でも調整されているように見受けられる。だが実際は、1980年代後半以降、政府側の人口統計には現れない中国内地からの余剰労働力としての漢族の自発的移住の潮流、すなわち「民工潮」（盲流）が押し寄せており、実質的な漢族人口の肥大化現象がシブソーンパンナーでも急速に進行し、漢族が少数民族を経済的にも、文化的にも包囲する体制が拡大している〔管野 1995:55-56〕。

2. 社会主義化とタイ・ルー社会

1950年代は、国境に沿った雲南省の周縁地域に居住する少数民族に対しても、一律に社会主義体制への編入と改造を図る民族政策が施行されていった時期だが、最大の焦点は土地改革をいかに円滑に進めるかにあったといえよう〔馬 1993；周・李・和 1991:26-80〕。社会発展段階論により「封建領主制」もしくは「封建農奴制」に属すると規定されたシブソーンパンナーには、中国内地の漢族社会で地主を暴力的に打倒していったような過激な形態の「階級闘争」ではなく、少数民族側の政治的エリートとの話し合いによって土地改革を進める比較的穏健な革命路線がとられた。これは「和平協商土地改革」と呼ばれたが、自治州の首府である景洪地区のタイ・ルー農村で試行した後、シブソーンパンナー全域へと拡大され、1956年の時点では完成をみたのである。

なお、この土地改革が農村部にまで徹底できた要因の一つに、中国共産党の指導を受けた革命幹部や工作指導員からなる「民族工作隊」の活動があげられる。⁸⁾ 彼らの大半は漢族である。

8) 民族工作隊は景洪地区の曼暖典村をはじめ、いくつかの典型となるタイ・ルー農村を選んで調査した。さらにガーツ・トン、ガーツ・サイ付近の17村落を調査し、タイ・ムアン、クンファンツァオなどの等級関係、農村各階層の社会経済状況、封建政治制度、土地所有関係と階級分化の現状を把握していった。その後、調査の範囲が西双版纳の全域に拡大され、11の「版纳」、28のムアン、662のタイ・ルー農村（20,992戸、109,888人）に及んだという。劉岩〔1996〕、王連芳〔1993〕などを参照。

少数民族の風俗習慣を尊重し、彼らの言語を学び、貧しい農民に対する食糧支援、農業の技術指導、家屋の修築、倉庫の建設、医療・衛生事業などをそれぞれの任地で実践するよう党中央から指示を受けており、そのため、国民党時代の漢族とは違うという意味合いから「新漢人」と呼ばれることもあったという〔劉 1996:44-45〕。

だが、1958年になり大躍進運動が始まると、それまでの穏健な土地改革の指導方針は批判され、初級合作社の段階から人民公社へと一気に改造していく急進的な集団化政策が主流となった。その後もいくつかの政治運動が繰り返されたが、66年からはシブソーンパンナーでも文化大革命へと突入していった。タイ・ルーの農村部では「政治辺防」を名目とする過激な階級闘争が展開し、1950年代前半の土地改革の成果を「和平主義」「修正主義」として否定する一方、しばらく中断していた人民公社も再度導入された。こうした過程のなかで、「民族」にかかわる問題や領域はすべて階級問題のなかに還元され、民族区域自治は事実上の廃止となった〔周・李・和 1991:123-132〕。

ところで、この時期はシブソーンパンナーの民族間関係が大きく転換した点でも重要である。前節で検討したように、漢族とタイ・ルーの人口比率の逆転現象が生じたのである。自治州の成立以来、小城镇や地方都市、漢族コミュニティ、国营農場などの建設とあわせ、それらをつなぐ道路網や交通システムの整備が進められたが、タイ・ルーとその他のエスニック・グループの間に存在した棲み分け的な相互関係のなかで、漢族は第三の極を形成し、その規模を拡大しつつ、自給自足的に構成される傾向の強い両者の伝統的な生活世界を大きく改変していった。また、文化大革命期における漢族人口の急増にともなう乱開発状況は、シブソーンパンナーの民族間関係に悪影響をもたらすと同時に、ゴム栽培を主体とする国营農場とタイ・ルーの農民村落との関係を双方の生活圏の衝突によるかなり対立的な事態へと変質させた〔景洪東風農場 1983:164-166；李 1987:25-26〕。

3. 改革開放とタイ・ルー社会

11期三中全会（1978）で4つの現代化路線と改革開放の方針の指示にしたがい、それまで中国社会に多大の停滞と混乱をもたらした急進的な集団化政策が放棄されると、民族政策の面でも大きな方向転換が起きたのは当然であろう。政策目標が「階級闘争」を基本とするものから、民生の安定と社会発展をめざす「経済建設」へと路線変更になり、否定されていた民族区域自治も再開されると同時に、漢族と少数民族の関係の修復と改善が重要課題となった。その結果、1980年代には、50年代後半から文化大革命の時期に多くの犠牲を払いながら強制的に推進された急進的な集団化過程と逆方向の社会変動が展開していくことになったのである〔周・李・和 1991:133-156〕。

経済改革は、停滞した農村経済の立て直しを図ることから始まった。人民公社に代わって個

人や農民世帯、各種の企業単位などが生産活動を請け負う責任生産制が始まり、自留地での栽培や副業が認められ、農貿市場（自由市場）も再開になった。その結果、農業生産に対する農民の生産意欲や積極性が高まったが、自留地で栽培した蔬菜、農産物のほか、余剰米などが農貿市場には豊富に出回るようになり、諸民族の経済的な相互依存関係が強まった。また、経済作物としてゴム、茶、砂仁、甘藷などの栽培が奨励され、少数民族の経済収入も増えていった[楊 1985:104-105]。

タイ・ルー農村の場合、国家への食糧上納および自家消費部分をのぞいた余剰米の販売、マンゴーやパイナップルなどの果樹栽培、蔬菜、ゴム栽培、養鶏、養豚などの副業が営まれた。⁹⁾ また、タイ・ルーの女性が農産物や加工食品、手工業品などの販売に積極的にかかわる状況は1980年代初めよりみられたが、このような副業的な経済活動は現在ではタイ・ルー農民の重要な現金収入源の一つとなっている。

ところで、シブソーンパンナーの経済的活況は、漢族を中心とする「民工潮」（盲流）を呼び込む契機ともなっている。この国内人口移動には中国各地の少数民族も若干ふくまれているが、あくまでも主体は中国内地の漢族である。文化大革命の時期の国内移民と性格が異なる点は、国内の余剰労働力が自発的な意思により移動していることである。外来の漢族が活動する範囲は多様化し、商品作物・蔬菜の栽培などの農業経営、流通・運搬業、飲食・サービス業、観光・旅行業、国境貿易など、さまざまな分野への積極的な社会進出が起きている。

こうした事態の進行は、少数民族側の就労機会や社会参加の可能性を奪う結果ともなる一方で、タイ・ルーと漢族の出稼ぎ移民の結びつきや相互依存関係が都市近郊の農村部では強まってきた。例えば、大規模な経済開発の進む景洪地区の場合、四川、湖南、安徽などの各省から来た漢族の出稼ぎ農民がタイ・ルーの農地を借り受け、西瓜、唐辛子、蔬菜などを栽培し、天津、上海などの沿海地域の主要都市に出荷するという青果取引業がすでに1980年代後半から開始され、90年代に入り急成長している。これなどは、人的ネットワークや組織化、市場開拓、企業経営のノウハウ、生産技術等のいずれの面においても勝る漢族とそうでない少数民族との民族的境界を越えたネットワーク化の一つのタイプをなすが、生態系の違いを基盤としたローカルで棲み分け的な民族間関係とは明らかに一線を画している点が重要である。こうした現象は、近年の中国側の公式的見解でしばしば指摘されるように、少数民族地区の経済発展を促進する「民族融合」的過程とみるよりも[楊 1993；1995]、社会的現実における漢族優位の力関

9) タイ・ルー農村では、1983年には全州の農村で世帯単位の請け負いを基本とする各種の生産責任制により、作物栽培、養殖、運送、商業などに従事する「両戸」（専業戸、重点戸）が多数出現した。この「両戸」の比率は商品経済の発展を測る指標とされ、一般的には城鎮近郊部で高くなる。景洪地区では、城鎮近郊農村の曼景蘭村（バーン・ツエンラン）の場合、総世帯数481戸のうち、182戸（38%）が「両戸」であり、州全体の平均値6.4%に比べ、圧倒的に高かった点が特徴である[譚 1986: 281-282]。

係のなかでは少数民族社会がより周辺的で従属的な関係性のなかに構造化される可能性を内在しており、漢族と少数民族の間の民族的境界を無化、ないしは脱構築していく力学的過程とみた方が正鵠を得ているようにも思われる。¹⁰⁾

Ⅳ シプソーンパンナーにおける民族間関係とエスニシティの動態

1. タイ・ルー社会の変容とエスニシティ

西双版纳傣族自治州の成立以前、シプソーンパンナーおよびタイ・ルー社会では、「王」・ツァオープンディンを頂点とし、細かく差異化された官職と政治的称号、身分カテゴリーの体系によって構造化される政治・社会組織の存在が顕著な「階級社会」であった。¹¹⁾ だが、「和平協商土地改革」およびそれ以降の度重なる社会改革、政治運動により、「王」、家産官僚組織、サンガ、ムアンの守護霊祭祀にかかわる祭司集団、農民村落に対する管轄組織など、王国的政体としてのシプソーンパンナーを維持する政治支配機構や宗教的権威、身分制的秩序の総体はことごとく「封建的」な残滓として改革の対象になった。特に、「王」という模範的中心、および王権が徹底的に解体された点は重大であり、タイ・ルーとしての民族的境界の維持やアイデンティティの編成に変動を促す重要な要因となった。これはシプソーンパンナーの政治統合とタイ・ルーとしてのアイデンティティ維持の伝統的システムの解体を物語っているが、その結果、王国全体あるいは各ムアンを単位とした村落や個人をめぐる関係性が、垂直的秩序から水平的構造へと標準化され、社会主義体制のもとに再編されていった[王 1993:8-9; 譚 1986:268-269]。

大躍進政策から文化大革命にかけての期間は、少数民族の文化伝統や文化的差異を否定する「民族融合」や多数派集団としての漢族社会への構造的同化が強調された。大躍進運動のなかでは、生産活動に従事しないという理由で、仏教サンガへの攻撃がなされたが、文化大革命では仏教信仰、ムアン、村落、世帯などの守護霊、祖霊などへの祭祀をふくむ一切の儀礼的实践が「封建迷信」「宗教迷信」と糾弾され、寺院やパゴダの破壊と閉鎖、僧侶、宗教的職能者に対する弾圧も激しさを増した。この少数民族の風俗慣習や文化伝統を無視する急進主義路線は、タイ・ルー社会にも相当大きな動揺を与え、国境を越えてタイやミャンマー領内へ脱出を企て

10) 例えば、1980年代以降の改革開放の拡大と市場経済化による少数民族の「経済発展」の成功例と目される基諾族では、漢族社会による文化的包摂、すなわち漢化が急速な形で同時進行していったのである。

11) シプソーンパンナー王国のタイ・ルーは、王族・貴族ではモム、ウン、農民階層ではタイ・ムアン、クン・フアン・ツァオなどの身分制カテゴリーに属した。後者はレークノイ、ホーンハイに分かれていた。これらのカテゴリーは通婚関係や村落形成、居住地の選定などの規準となり、同一のカテゴリー間の相互関係が優先される傾向があった。各カテゴリー間では土地所有の状況が不均質であった。加藤は景洪盆地（ツェンフン）における伝統的な政治体系、社会経済関係、農民支配のあり方を事例に詳細な検討を行っている。加藤 [1991], Kato [1994] 参照。

る農民が続出したという。

しかしながら、このような抑圧的な社会状況のなかでも衣食住といった、非政治的な分野におけるタイ・ルーとしてのエスニシティの表出は残された。農業集団化が進行したとはいえ、かつての政治単位であるムアンの統治領域が人民公社として継承され、基本的な社会空間としてのバーン（村落）も「生産隊」という形で連続したことにより、言語・衣食住など、日常生活レベルでの文化的アイデンティティの保持は十分可能であった。同時に、上座仏教の禁止などにより、タイ・ルーとしての自己意識は中国共産党や漢族への抵抗や反発という形をとって内面的に維持され、漢族との民族的境界がむしろ強調される傾向を示したのである〔長谷川 1993:248-250〕。

2. タイ・ルー意識の再生

繰り返し述べてきたように、タイ・ルー社会は、1950年代の「和平協商土地改革」以降、大躍進運動や文化大革命で追求された急進的な集団化政策、人民公社への強制転換、過激な階級闘争などを経験した。彼らの生活世界は外部に発した政治・社会変動のなかで常に翻弄されてきた。80年代に入り、対外開放、市場経済、都市化、マスメディア、漢文化、学校教育など、彼らの生活世界のなかには外部からさらに多様な要素が付け加わっている〔瞿 1995〕。集団化政策の下での閉鎖的で自給自足的な生活様式はすでに過去のものとなる一方、タイ・ルーとしての伝統的な民族的境界の維持、民族間関係のあり方にも変化が生じている。以前は農村部ではきわめて少なかったタイ・ルー女性と漢族男性との通婚関係なども増加する傾向にあるという〔鄭 1990; 1991〕。

1980年代前半、農業生産力の増大と商品経済の進行のなかで経済収入を増やしたタイ・ルー農民は、こうして得た富を家屋の新築や耐久消費財、農機具の購入にあてたほか、大躍進から文化大革命の期間に破壊された仏教寺院やパゴダの修築などの宗教的な行為にむけた。これはタイ・ルーの間ではターンと呼ばれている功德の蓄積行為であった。その結果、ほとんどの村落の寺院は、農民の自発性にもとづいて再建されたのである。

この伝統の復興現象は、明らかに急進的な集団化政策や文化大革命に翻弄されたタイ・ルーが自己の文化的アイデンティティを取り戻す動きであった。寺院の再建ラッシュと同時に、壊滅状態にあったサンガも再生した。修復された寺院で見習い僧となる青少年は増加の一途をたどった。これにより、農村部では男子児童が学校教育を途中で放棄し、上級学年になるにつれて女子だけになってしまうという問題が起こり、その対策に自治州の教育部門や関係者もいろいろと方策を講じ、タイ・ルーに対する義務教育の実施方法やカリキュラム編成の見直しを行わなければならなかったのである。¹²⁾

こうした文化伝統の再生現象と並行して、トゥア・タムもしくはラーイ・タムと呼ばれる経

典文字（老傣文）が復活した点にも注意しなければならない。これと同種の經典文字は、ミャンマー・シャン州のタイ・クーン、タイ北部のタイ・ユアンなどの間でも使われている。タイ・ルーにとっての古典的知識としての仏教經典、叙事長詩、医薬書、曆法などはみなこの文字で書かれている。自治州政府のタイ・ルー幹部や知識人たちは、タイ・ルーとしての文化伝統が断絶してしまうことへの危機感から、老傣文を簡略化して1950年代に創製された新傣文ではタイ・ルー語のいくつかの音韻が正確に表記できないなどの問題点を改めて指摘し、新傣文を旧字体に戻す要求を国家側に対して起こした。国家側もそれを認めたのである [Hsieh 1989: 243-247]。

上座仏教の復活、寺院の再建、老傣文への関心の高まりなどから窺えるのは、タイ・ルーが隣接しあうタイ系諸王国で緩やかなまとまりを保持した地域的世界への回帰を表明しはじめたという点であり、その背景には対外開放の拡大による中国と東南アジア諸国との関係改善と交流再開にともなうタイ・ルーの汎タイ族意識の高まりがある。この動きのなかで、シブソーンパンナーでは仏教サンガを立て直すために、タイ北部のランブーン市郊外にあるプラプッタバート・タックパー寺が留学僧の派遣先として正式に選択されている点は重要である。歴史的にシブソーンパンナーの上座仏教に大きな影響力のあった北タイの仏教との連携と交流が強く希求され、タイ・ルーのエスニシティの表出が、国家側の宗教政策が容認する範囲内で汎タイ族的な方向へ振り向けられているといえよう [長谷川 1995:66-68; Peters 1990:348-349]。

3. 文化的アイデンティティと民族的境界

自治州成立以降のタイ・ルーをめぐる民族間関係の構造的変化は、漢族がシブソーンパンナーに大量に定住し、タイ・ルーとの生活世界レベルでの相互浸透を日常化し、前者の後者に対する政治的、経済的、文化的圧力をしだいに強めていったという点である。漢族と傣族との人口比率の逆転は、それが決定的な事実となったことを示している。この点をタイ・ルー側からみると、中国という全体社会、それを構成する多数派としての漢族および漢文化からの諸種のインパクトの結果、タイ・ルーとしての文化的アイデンティティと民族的境界のあり方にゆらぎが生じ、変容がもたらされることを意味する。例えば、上座仏教はタイ・ルーのアイデンティティの核となる文化要素だが、1980年代前半に復興しはじめたとはいえ、大躍進から文化大革命の期間にかけての中断により、世代間における断絶は著しく、総体としてみれば、仏教イデオロギーの後退はまぬがれない傾向にある [譚 1986:274-275; 鄭 1991:46-47]。

現代のタイ・ルー社会では、タイ・ルーの個々人は、仏教文化と漢文化の交差する過程で、前者を核とする自文化の優越性への意識や信念が中国社会の現状と乖離してしまう心理的葛藤

12) 景洪地区の上座仏教の復興過程で生じた学校教育と宗教的慣行との矛盾については、省政協民族宗教委員会調査組 [1989] 参照。また、拙稿 [1990; 1991; 1995] も参照。

のなかにおかれている。それは、学校教育と出家慣行との矛盾、およびそれをめぐる国家のまなざしと評価のなかに端的に表れる。上座仏教の伝統にしたがえば、タイ・ルーの男子児童が寺院で一定期間の出家経験をもつことは人間的な成熟や自文化の習得へとつながる通過儀礼として重要な意味をもっていた。これに対し、国家側はこうした出家慣行がタイ・ルー児童の就学率と進学率の上昇を阻害する要因であるとみなし、学校教育の浸透が比較的順調な基諾、拉祜、哈呢などの諸「民族」に比べ、「後進的」と評価する傾向がある〔穆 1990:251-253〕。その結果、都市近郊部の農村では、かつてのように男子児童を寺院で見習い僧とするよりも、学校教育を優先させることが一般的であり、タイ・ルー社会における仏教イデオロギーは明らかに退潮している。タイ・ルーにおける文化化は、仏教文化と漢文化の間で2つの方向に分かれてきているといえよう。都市化と観光開発の進む景洪地区の近郊農村などでは、漢文化への接近や傾斜がもはや決定的なものとなっている。

こうした分裂状況は、学校教育で進められるタイ・ルー語（民族文字）と漢語のバイリンガル教育をめぐる現状のなかにも認められる。シブソーンパンナー全域の小学校を対象にした調査によれば、タイ・ルーの児童に対する言語教育に対し、「漢語を主とする」立場と「民族文字を主とする」立場とが併存し、全体としては前者が後者をはるかに上まわっているが、最終的な結論は出ていないのである。¹³⁾

学校教育と漢語の運用能力の向上を重視するタイプの人々の間では、上座仏教という要素は、もはやそれほど大きな比重を占めない。漢文化への接近が最大の関心事である。他方、景洪地区を離れた農村地帯のタイ・ルーの間では、あいかわらず上座仏教の知識獲得が文化化過程において重要な社会的意義を担っている感がある。漢族人口が多く、社会変化の著しい景洪地区とそれ以外のムアン、例えば、勐海、勐混、勐遮地区と比較してみると、後者では男子児童の出家慣行は根強く、通過儀礼として見習い僧を経験する傾向が圧倒的に高いのである〔長谷川 1991:84〕。だが、その場合でも、個別の事例をみていけば、タイ・ルー個人における文化化の過程が多様化している状況が明らかとなる。文化化過程の核に、上座仏教をおくか、それとも漢文化をおくかという選択は、今日のタイ・ルーにとって必須の事態となっている。だが、いずれのタイプであっても、文化的アイデンティティの獲得を全面的に漢文化へ譲ってしまう状況は目下のところ少なく、漢文化へ接近する一方、それから一定の距離をとり、自分たちの生活様式や風俗・習慣を失わないように努める傾向が認められる。例えば、近代的な改変を受けつつもタイ・ルーとしての伝統的様式を濃厚に残す家屋建築の普及、色彩あざやかな工業生産のプリント柄の布地で縫製された、洋装スタイルとは異なる現代的趣をもった女性の民族衣装

13) 孫雨亭が1987年1月に実施した調査の結果によれば、シブソーンパンナー全域の傣族小学1,087のうち、漢語だけを学習しているのは709クラス・17,281人、傣文と漢語の両方を学んでいるのは356クラス・9,568人、傣文だけは22クラス・386人という状況である〔孫 1990:59〕。

の流行などには、タイ・ルーとしての自文化の呈示やそれへの固執によって漢族との民族的境界を維持しようとする、彼らの自己意識のありようがはっきりと表明されている。

V 国境を越えるネットワークと民族間関係

1. 「黄金の四角形」論の台頭

中国・東南アジアの国境地帯に位置するシブソーンパンナーのエスニック・グループにとって、漸次的な市場経済への移行をも含意した人民公社制度の廃止と同等、あるいはそれ以上に大きな意義をもったのは、対外開放政策の展開である。冷戦体制の終了にともない、1980年代後半からは、中国とミャンマー、タイ、ラオス、ベトナムとの外交関係が次々に改善されていったが、これによりシブソーンパンナーと周辺諸地域との相互の関係は、閉鎖系から開放系へと転換した。具体的には、定期市における物資交換、親族間の往来や労働交換、通婚、仏教サンガの交流、国境貿易の展開など、多様な広がりと内容を有するエスニック・グループ、地方政府、あるいは国家間の相互交流や経済関係が活性化していった〔劉稚 1994:228-264〕。1990年代に入り、雲南省は他の西南各省との連携を固める一方で、東南アジアあるいは南アジア諸地域との経済協力や文化交流を進める対外開放戦略を独自に打ち出し、国境地帯に多数の「口岸」（対外的な貿易拠点）を設置し、複数の国家間に跨った局地経済圏や経済開発区の創出を積極的に推進するようになっていく〔李・何 1992〕。

ミャンマー、ラオス、タイ3国近隣に位置するシブソーンパンナーの場合、西南中国と東南アジアとを結ぶ大動脈として国家側が強力に推し進める「瀾滄江—メコン河流域区域」構想の中核部を占め、急ピッチでインフラ整備や都市建設が進められている。自治州首府である景洪は1993年それまでの県制から市制に昇格したが、国家級の貿易港に指定されると同時に、国家級の観光リゾート区の指定を受け、瀾滄江と流沙河の合流する一帯の総面積6.8km²の用地に観光開発区が目下建設されている。将来は城市区を大幅に拡大し、住民人口と流動人口をあわせて8万から20万人程度へと拡大する方針だという〔朱・刀 1995〕。

この構想の骨子は、瀾滄江—メコン河航道を利用した交通・運輸体系と主要都市をつなぐ道路網を整備し、観光開発、国境貿易、技術協力、環境保護などの面で、中国、ミャンマー、ラオス、タイの4カ国が相互協力と連携を強めると同時に、国境に跨る経済開発区を創出するというものである。単独では解決できなかった諸問題を克服し、経済的な後進性や周縁の状況からの脱出をねらったもので、タイ政府側の提唱する「黄金の四角形」構想とはほぼ重なりあう内容となっている。地域的には、雲南省の思茅地区、シブソーンパンナー、ラオス側のナムター、パークベン、ウドムサイ、ポンサーリー、ルアンパバーン、ミャンマーのシャン州東部（セントゥンを中心とするサルウィン川以東）、タイのチェンマイ県、チェンライ県など、総面積にして

約16万km²が対象とされている [張光平 1994; 張繼焦 1996]。

この開発構想については、中国と東南アジアとの外交関係が正常化にむかい始めた80年代後半から協議が重ねられてきたが、¹⁴⁾ そのなかで中国とタイはその大きな推進力となってきた。その際、注目したいのは、それぞれの国家におけるローカルな権力主体が媒介役としてきわめて重要な役割をはたしているという点である。中国側ではシブソーンパンナー、タイ側ではチェンライの県政府や商工会議所などが地域間レベルの外交活動を積極的に展開している。一例をあげよう。1993年は4カ国の観光部門の関係者や地方政府の代表がチェンライや景洪を会場にしてシンポジウムや国際会議を開催し、観光開発をめぐる諸問題が協議され、国境に跨った地域間協力で大きな飛躍がみられた年だが、シブソーンパンナーはチェンライ県の商工会議所が組織したシンポジウムに自治州長以下、各県代表、自治州政府の関連部門の責任者からなる代表団を派遣し、具体的な事務交渉を担当した。代表団はこのシンポジウムの後、メーサイからタチレク、ケントウン経由で帰国したが、その後、シブソーンパンナーに対するタイ側の投資や合作内容が調印されていった [李 1994:16-24]。

以上のような動きは、「国境」画定後、断片化される過程をたどったシブソーンパンナーとミャンマー、ラオス、北部タイをつなぐ地域交流圏の再生を意味する。これはルー、クーン、ユアン、ラーオなどのタイ系諸族がかつて形成した諸王国の緩やかな地域的まとまりを歴史的背景にもったつながりでもあるが、自治州の設置により再編されたシブソーンパンナーという、起源的にはタイ・ルーの王国的政体に由来するローカルな権力主体が、既存の国家体系間に占める自己の地政学的な優位性を後ろ盾とし、自治州としての自律性を拡大しつつあることを示す。同時に、市場経済化のなかで、自治州、県、村落、世帯、個人など、様々なアクターや単位間でネットワーク化が進行し、民族間関係でもそうした動きに対応した連携や相互協力、補完関係の形式がでてきたことをも意味している。これは「辺境貿易公司」「商行」「商号」と呼ばれる、様々の経営規模をもつ国境貿易の企業単位が90年代に入って急増している点にもみてとれる [刀 1994:152; 1995:192-198]。これらの企業集団は主として、中国の生活必需品、工業製品を東南アジアに輸出し、木材、原料を輸入するという形式の対外貿易に従事しているが、経済技術合作、実業開発、労務輸出なども同時に扱っているという。こうした企業単位こそが、国内では沿海部の先進地域との、国外では東南アジア側の華僑・華人資本との結びつきを強め、地域間・民族間のネットワーク化の大きな推進力となっているといえよう。

2. 観光開発と人口移動

シブソーンパンナーの観光化および観光開発は、対外開放の拡大過程と密接に連動しあっ

14) 瀾滄江—メコン河流域の経済開発区の構想をめぐる4カ国の協議の進行状況の詳細については、馬樹洪 [1995:178-203]、車志敏 [1996:51-64] が詳しい。

いる。すでに1982年には「風景名勝区」に指定され、雲南省を代表する観光地としての発展を期待されていたが、対外開放政策の進展のなかで、しだいに観光地としてのブランド化組織化が進み、今日の観光ガイドブックに紹介されているような「亜熱帯風光と民族風情を主体とする」観光地としてのシブソーンパンナーがしだいに創出されていった。その後、タイ北部やミャンマー、ラオスとの連携が進むにつれ、それらと差異化される地域アイデンティティを構築し、中国内外に積極的にアピールしていく観光開発の必要性が主張されている[刀 1993；車 1996：241-257]。

観光ルートについては、シブソーンパンナー域内の周遊コースのほか、簡単な手続きで出入国できる「跨国辺境旅游」（国境に跨る辺境観光）という名で団体観光ツアーが企画され、中国人観光客はタイ、ミャンマー、ラオスなどへも手軽に行けるようになっていく。特に、瀾滄江—メコン河水系を利用した観光ツアーはその目玉とされる観光コースである。シブソーンパンナーを経由して黄金の三角地帯、北部タイの主要都市、さらにはバンコクなどを訪れることもできる。このような観光ルートの開発は、1993年5月に勐臘県（ムアン・ラー）の「瀾滄江国際公司」とタイ側の「金三角島公司」の間で協定が結ばれ、本格的な観光業務が開始されたことを契機とするという[蓋 1994：154-158]。

いずれにしても、観光ルートの基盤整備と観光商品の開発が一定の功を奏し、シブソーンパンナーへの観光客は急速に増加している。なかでも目立つのは、中国国内の漢族が最大多数の観光客層を構成するようになった点である。きわめて不完全な統計だが、シブソーンパンナーを訪れた海外からの観光客は1984年の時点で1,536人、対外開放地区が拡大した翌年には3,198人、87年には6,908人と緩やかな伸びを示したが、90年代に入ると、台湾、香港、タイなどからの観光客も増加し、92年には13,600人と緩慢な上昇傾向を示している。これに対し、国内観光客は急速に増加する傾向をみせている。85年で約2万人、87年には約2.5万人にすぎなかった数字が、91年には約60万人、翌年には約120万人と、異様とも思えるほどの急展開を示している[劉・胡 1990：579；征 1993：222；刀 1993：5；1995：192]。筆者の聞き取りによれば、国内観光客のほとんどは漢族であり、雲南省の昆明地区からのほか、上海、北京、四川、福建、山東、東北地区などが多いという。その結果、こうした人々を対象とした国営、個人経営の旅行社も急速に増加している。¹⁵⁾ いずれにしても、国境貿易と観光開発の拡大のともなう人口移動、あるいは交流人口の動態は、次節で検討するように、シブソーンパンナーにおける観光文化の創出を方向づけ、タイ・ルーの民族文化の商品化、エスニシティの表出が主として多数派としての漢族観光客を対象にして演出操作されることを含意している。

15) 1992年以降、景洪地区では一挙に多数の旅行社が出現した。筆者が調査した1994年8月の時点では景洪市内だけで60以上の旅行社があった。そのうち10数社が国営であった以外は、いずれも個人経営であった。旅行社の経営者の大半は漢族で、国営農場生まれの漢族も多く参画している。

3. 観光開発とタイ・ルー文化

タイ・ルーの存在は、シプソーンパンナーの観光化の促進に大きく寄与してきたという経緯がある。1980年代に入ると、タイ・ルーの伝統的な新年を祝う仏教行事、「澆水節」（水かけ祭り、タイ・ルー語ではサンハーンピーマイ）を観光の目玉とした団体ツアーが数多く企画された。その際、いくつかのタイ・ルー村落では、訪れた観光客をタイ・ルーの伝統料理でもてなすという方式がとられたが、観光客は同時に、タイ・ルー農村の暮らしぶりを垣間見ることができる仕掛けでもあった。観光のガイドブックには必ず紹介され、シプソーンパンナー観光の「名所」として定着した感のある曼景蘭村（バーン・ツェンラン）は、観光客を積極的に受け入れた村落の代表格であった。

この曼景蘭村において、タイ・ルーが自己の文化伝統を積極的に観光客向けに商品化する現象が起きたのは1986年である。観光客の往来が多い道路に面した村民の一世帯が自分の家を改造して、タイ・ルーの伝統料理を提供するレストランを開業したのである。シプソーンパンナーで最初のタイ・ルーの経営する民族料理のレストランであり、しかも「本物」のタイ・ルー料理が村人の接待で食べられるとあって、開店以来、中国内外の観光客の人気を博した。当時、毎月3,000元の収入があり、わずか1年間で6万元を稼いだという。これが引き金となり、この村落では続々と同様のレストランが出現し、ユニークな特色をもつ飲食店街を形成するにいたった〔黄 1993:28-29〕。

その後、景洪地区ではこの成功をきっかけに、いくつかのタイ・ルー農村が観光化に積極的になり、全国的な「民族旅游」（エスニック・ツーリズム）のブームの影響を受け、自治州の政府部門指定の「民俗村」と呼ばれる観光拠点が作られた。ここでは定期的に民族舞踊や「澆水」（水かけ）のパフォーマンスが村の青年男女により演じられ、観光客はタイ・ルー料理を味わいつつ、それらを楽しめる仕掛けとなっている。¹⁶⁾

民俗村に代表される、こうした観光文化の創出は、その後、景洪地区以外にも普及し、現在ではきわめて一般的な形式となっているが、観光客としての漢族、東南アジアからの華人、香港・台湾同胞などの増加に対応して起こった点が注目される。この背景には、雲南省レベルの観光政策、自治州政府や観光局、外部の旅行業者の積極的な後押しがある。だが、曼景蘭村に典型的なように、タイ・ルー農村が主体的に自治州サイドの観光開発に対応していった点も指摘できる。特に観光化にとって有利な条件を備えた村落では、1980年代の後半以降、タイ・ルーとしてのエスニシティの表出領域が観光文化の演出に大きく傾斜しはじめている。観光開発による経済的利益を直接に享受できる民俗村やその周辺村落ではそれが顕著である。観光向

16) 観光産業の発展にともない、一定の学歴水準をもった若いタイ・ルー女性の社会進出が顕著な分野となっており、国内外に流通する観光地としてのシプソーンパンナーのイメージ化にとって重要な象徴作用をはたしている〔江 1995:305-308〕。

けの自文化の呈示は、一般的には自己の文化伝統の在庫のなかから、経済的利益につながる文化要素を商品化していく過程をたどるが、シブソーンパンナーのタイ・ルーの場合、中国社会における観光文化の普遍的な形式ともいえる、民族料理や民族舞踊などに重点があり、しかも多数派としての漢族のまなざしのなかにある「傣族像」を操作的に演出して再構築されている点の特徴である。¹⁷⁾

VI ま と め

現在、西南中国から東南アジア大陸部にかけての国境地帯では、冷戦体制の終結にともなうボーダレス化と市場経済の進行、地域間交流の活性化、地域間秩序の再編などが顕著な動きとなっている。その結果、従来それぞれの国家体系の周縁部で断片化され、後進性を付与されていたエスニック・グループや少数民族、あるいはそれらの棲み分け状況からなる地域社会は、その様相を大きく変貌させている。その結果、所与の国民国家を前提とし、その内部的な関係構造や規定性とのかわりだけで、エスニック・グループや「民族」をめぐる諸現象を理解することはますます困難になりつつある。

これまでの検討から明らかなように、中国領内のタイ・ルーは社会主義体制への移行後、民族識別工作による傣族としての再編化、民族区域自治の導入、民族政策の実施、漢族社会との接触機会の増加や漢文化の影響など、彼らをめぐる関係論的状况は、東南アジア大陸部のそれとは様相を異にした文脈のなかにある。また、今日シブソーンパンナーで生成している現象は、従来の閉鎖的でローカルな関係性を超えた範囲のネットワーク化の進行である。国境を越えたつながりが緊密になる一方で、中国国内におけるエスニック・グループ相互の融合過程も急速に進み、タイ・ルーのエスニシティの表出様式に大きな影響をもたらしている。権力と資源の再配分システムが社会主義型から市場経済型にむかうなかで、伝統的なローカルな社会空間におけるエスニック・グループの布置とそれに依拠した民族間関係に代わって、市場経済化に対応した新たな民族間分業が起きているのである。

このような状況のなかで、「黄金の四角形」と名づけられる中国・タイ・ミャンマー・ラオス4国の国境地帯に跨る経済開発区の創出過程と対応し、その一つの核となるシブソーンパンナーでは観光開発が自治州の重要な産業部門となりつつある。そして、観光化において有利な条件と文化的資源を多く保有するタイ・ルーは、観光開発のなかでも一定の位置を占めるに

17) シブソーンパンナーのタイ・ルー農村が全般的な傾向として、漢族を中心とする観光のまなざしに晒される機会が増えたからといって、それに即時に反応して民族文化の商品化、観光向けの自文化の呈示が起きるわけではない。あくまでも「旅游点」と呼ばれる観光拠点に指定されたタイ・ルー村落およびその影響が波及する周辺領域に限定される現象である。この点については、漢族を中心とする中国社会における傣族像の形象化をめぐる諸問題の検討とあわせ、別稿を予定している。

たっている。

こうした事態の進行に対し、カイズ流の図式を援用して、解放後のタイ・ルーのエスニシティの変遷をたどることは容易である。ローカル・アイデンティティは、1950年代の民主改革以降の度重なる政治運動や階級闘争、集団化政策のなかで退潮した。80年代に進行した市場経済と観光開発は、タイ・ルーにマーケタブル・アイデンティティを表出する機会と可能性をもたらし、その傾向は90年代に入り、ますます顕著なものとなっている。市場経済化の衝撃を受けて、経済的利益の追求を基礎とした民族間関係やネットワーク化が進行し、その結果、伝統的な民族的境界はその一部が解体すると同時に、観光向けの自文化の再構築を促進する結果となっている。トランスナショナル・アイデンティティにしても、壊滅的な状況にあった上座仏教が再生していく過程そのものがそうしたエスニシティの表出であったのである。

しかし、民族的アイデンティティの位相の類型論的な解釈よりもさらに重要な問題は、タイ・ルーにおけるエスニシティ表出の変遷の背後にある権力論的關係、民族間力学にかかわる諸問題の検討である。これまでの考察により、政治的、経済的、文化的な多数派としての漢族との相互関係、あるいは相互交渉過程のあり方が、タイ・ルーのエスニシティの表出を内容的な面でも方向づけてきたことが明らかである。観光産業が自治州の産業構造で重要部門となる過程で、創出されてくる観光文化やタイ・ルーとしての自己呈示は、多数派の漢族のもつ傣族イメージに沿うように操作されたものである。仏教や文字の再生により強化されるトランスナショナルなアイデンティティも、漢族からの圧倒的な文化的圧力を受けるなかでは、タイ・ルーとしての民族的境界を維持する対抗的な意味合いを帯びている。

東南アジア大陸部における国民国家とエスニック・グループ、「民族」との相互関係をめぐる人類学的研究は、冒頭でも論じたように、リーチやクンシュターター以来の伝統がある。国境が閉鎖系から開放系にむかうなかで、複数の国家領域に跨って生成している「地域」における民族間関係のメカニズムと動態にかんするトータルな社会理論の確立がいよいよ必要となってきた。国民国家の周縁では顕著な事実となっている、多様なエスニック・グループの非対称的な交差状況を内在し、国境の「内」と「外」で多極的、多方向的に浸透し作用する民族間力学が集積された磁場としての「地域社会」、そうした社会空間における民族間関係や民族的境界をめぐる個別具体的な民族誌の記述と分析検討が今後の大きな焦点となろう。

参 考 文 献

- 馬場雄司. 1993. 「北タイ、タイ・ルー族の守護霊儀礼と仏教儀礼——『伝統』の創造とエスニシティ」『パースニ学仏教文化学』6:51-68.
- . 1996a. 「タイ・ルーの移住と精霊祭祀〔概況〕——北タイを中心に」『東南アジア大陸部における民族間関係と「地域」の生成』（重点領域研究「総合的地域研究」成果報告書シリーズ26）林行夫（編）、108-136ページ所収.

- _____. 1996b. 「北タイ、タイ・ルーの移住・定着過程——ナーンにおける盆地開拓史とのかかわりで」『同朋大学論叢』73:61-98.
- 車志敏. 1996. 『跨世紀発展的思考』昆明：雲南人民出版社.
- 傣族簡史編写組. 1985. 『傣族簡史』雲南人民出版社.
- 刀愛民. 1993. 「為把我州建成通向東南亞重要窗口而努力奮闘——慶祝西双版纳タイ族自治州成立四十周年」『民族工作』1993-4:4-6.
- _____. 1994. 「“熱帯雨林”州の改革開放」『民族地区改革開放』図道多吉(編), 150-154ページ所収. 北京：民族出版社.
- _____. 1995. 「投資者施展宏図的地方」『中国民族自治指南』平措汪傑(編), 189-211ページ所収. 北京：中国藏学出版社.
- 刀永明. 1988. 「柯樹勳在西双版纳改土帰流の実質」『版纳』1988-3期:56-59.
- _____. 1989. 『車里宣慰司世系集解』雲南人民出版社.
- 蓋沂昆. 1994. 「九十年代雲南国際旅游面向——東南亞発展の現状及前景」『中国与東南亞国家関係論叢』胡才；鄭良樹(編), 152-162ページ所収. 雲南人民出版社.
- 瞿明安. 1995. 「城市化对西双版纳傣族社会生活的影響」『民族学研究』(中国民族学学会編) 11:133-139.
- 長谷川清. 1990. 「タイ族における民族文化の再編と創造」『文化人類学』8:116-126.
- _____. 1991a. 「『伝統』の改革——タイ族の文化変化をめぐって」『聖徳学園岐阜教育大学紀要』21:75-99.
- _____. 1991b. 「『父』なる中国・『母』なるビルマ——シップソーンパンナー王権とその〈外部〉」『王権の位相』松原正毅(編), 380-408ページ所収. 東京：弘文堂.
- _____. 1993a. 「雲南省タイ系民族における仏教と精霊祭祀」『実践宗教の人類学——上座部仏教の世界』田辺繁治(編著), 221-256ページ所収. 京都：京都大学出版会.
- _____. 1993b. 「多民族国家の周縁——シップソーンパンナーにおける民族政策の諸相」『聖徳学園岐阜教育大学紀要』25:75-99.
- _____. 1995. 「『宗教』としての上座仏教——シップソーンパンナー、タイ・ルー族の仏教復興運動とエスニシティ」『宗教・民族・伝統』杉本良男(編), 55-82ページ所収. 南山大学人類学研究所.
- 林行夫(編). 1996. 『東南アジア大陸部における民族間関係と「地域」の生成』文部省科学研究費補助金重点領域研究「総合的地域研究」成果報告書シリーズ26.
- Hsieh, Jiann. 1986. China's Nationalities Policy: Its Development and Problems. *Anthropos* 81:1-20.
- Hsieh, Shih-chung. 1989. Ethnic-political Adaptation and Ethnic Change of the Sipsong Panna Dai: An Ethnohistorical Analysis. Ph. D. dissertation, University of Washington.
- _____. 1995. On the Dynamics of Tai/Dai-Lue Ethnicity: An Ethnohistorical Analysis. In *Cultural Encounters on China's Ethnic Frontiers*, edited by S. Harrell, pp.301-329. Seattle: University of Washington Press.
- 黄洪慶. 1993. 「曼景蘭村傣味食品街——農民致富の啓示」『民族工作』1993-4:28-29.
- 江紅. 1995. 「西双版纳傣族婦女在旅游業中的特殊地位」『雲南農村婦女現狀研究』和鐘華；喬亨瑞(編), 305-308ページ所収. 昆明：雲南教育出版社.
- 菅野博貢. 1995. 「中国・西双版纳タイ族自治州への漢族移住とその社会的影響」『アジア経済』36(4):41-64.
- 加藤久美子. 1991. 「シップソーンパンナー・タイ族における伝統的農民統治の地形的分類——『盆地国家』ツェンフン(景洪)王国の分析」『東南アジア——歴史と文化』20:3-34.
- _____. 1997. 「シップソーンパンナーにおける『中央』と『地方』——ムアンチェンフンと周辺勢力との関係をめぐって」『東南アジア史の中の「中央」と「地方」』吉川利治(編), 44-81ページ所収. 平成6～8年度文部省科学研究費補助金(国際学術研究)成果報告書.
- Kato, Kumiko. 1994. Muang Politics in Sipsongpanna: A Comparison of the Categories of Land and People among the Muang. 『名古屋大学文学部研究論集』119・史学40:1-26.
- 景洪東風農場. 1983. 「場群団結互助共同建設辺疆」『民族団結之花』中共雲南省委民族工作部・雲南省民族事務委員会(編), 164-172ページ所収. 雲南民族出版社.
- Keyes, C. 1993. Who Are the Lue?: Revisited Ethnic Identity in Lao, Thailand and China. Presented at Seminar on the State of Knowledge and Directions of Research on Tai Culture, sponsored by the Nation Culture Commission, Bangkok, September 10-13.

- Kunstadter, P. 1967. Introduction. In *Southeast Asian Tribes, and Nations*, Vol. I, edited by P. Kunstadter, pp.3-72. Princeton University Press.
- 羅陽；羅丹. 1997. 「西双版纳地区傣族女性经商特征」『雲南民族学院学报（哲社版）』1997-1:58-62.
- Leach, E. R. 1954. *Political Systems of Highland Burma*. London: G. Bell & Son. Ltd.
- Lemoine, J. 1989. Minorities of the People's Republic of China. In *Ethnicity & Ethnic Groups in China*, edited by Chien Chao and Nicholas Tapp, pp.1-9. Hong Kong: The Chinese University of Hong Kong University.
- 李常林. 1993 「西双版纳傣族自治州的人口分析」『国策学論稿』李常林（編），103-120ページ所収. 芒市：德宏民族出版社.
- 李凌. 1987. 「西双版纳考察」『人類学研究（続集）』中国人類学会（編），15-38ページ所収. 北京：中国社会科学出版社.
- 李向忠. 1994. 「沿着東方多瑙河走出国門——三国之行及四方經濟合作會議記實」『版纳』1994-1・2:16-24.
- 李成鼎；何明（編）. 1992. 『雲南边境口岸貿易指南』南寧：广西人民出版社.
- 劉隆；胡桐元等（編）. 1990. 『西双版纳国土經濟考察報告』雲南人民出版社.
- 劉岩. 1989. 「对西双版纳傣族教育的思考」『民族工作』1985-11:28-31.
- . 1993. 『南传佛教与傣族文化』昆明：雲南民族出版社.
- . 1996. 「西双版纳和平協商土改回顧」『雲南文史資料選輯48 雲南民族工作回憶錄（三）』劉邦瑞（編），41-65ページ所収. 雲南人民出版社.
- 劉稚. 1994. 『啓示与抉择——周边国家民族問題与雲南对外開放研究』雲南人民出版社.
- 馬曜. 1993. 「論雲南边疆民族地区的和平協商土地改革」『中央民族学院学报』1993-5:37-46.
- 馬樹洪. 1995. 『東方多瑙河——瀾滄江湄公河流域開發探究』雲南人民出版社.
- Moerman, Michael. 1965. Ethnic Identification in a Complex Society: Who Are the Lue? *American Anthropologist* 67(5):1215-1230.
- 穆文春. 1990. 「西双版纳傣族自治州教育現狀」『中国边疆民族教育』王錫宏（編），248-261ページ所収. 北京：中央民族出版社.
- 彭逢燁. 1956. 『西双版纳的新面貌——西双版纳傣族自治州介紹』北京：民族出版社.
- Peters, Heather. 1990. Buddhism and Ethnicity among the Tai Lue in the Sipsong Panna. In *Proceedings of the 4th International Conference on Thai Studies, Kunming (11-13 May)*, Vol.3:339-352.
- 沈安波（編）. 1996. 『新編雲南省情』雲南人民出版社.
- 省政協民族宗教委員會調查組. 1989. 「学校与佛寺協調配合办好民族教育」『民族工作』11:9-11.
- 孫雨亭. 1990. 「西双版纳州義務教育考察報告」『雲南民族教育改革实践与探索』民族工作編輯部（編），57-64ページ所収. 雲南民族出版社.
- 譚樂山. 1986. 「西双版纳傣族社会的变遷与当前面臨的問題」『雲南多民族特色的社会主义現代化問題研究』261-290ページ所収. 雲南人民出版社.
- 王連芳. 1993. 「西双版纳傣族自治州成立前後的片断回憶——写在西双版纳傣族自治州成立四十周年之際」『民族工作』1993-4:6-10.
- 《西双版纳傣族自治州概況》編写組. 1986. 『西双版纳傣族自治州概況』雲南民族出版社.
- 征鵬（編）. 1993. 『西双版纳概覽』雲南民族出版社.
- 謝世中. 1993. 『傣泐——西雙版納的族群現象』台北：自立晚報社.
- 楊傣才. 1985. 「雲南西双版纳民族經濟現狀和經濟發展戰略問題」『民族經濟論文集』100-114ページ所収. 民族出版社.
- 楊荆楚. 1993. 「論改革開放中漢族和少数民族的關係問題」『雲南社会科学』1993-1:40-47.
- . 1995. 「族際大交流在当代中国」『民族團結』12:11-13.
- 余松. 1996. 「建立西双版纳傣族自治州的回憶」『雲南文史資料選輯48 雲南民族工作回憶錄（三）』劉邦瑞（編），29-40ページ所収.
- 鄭曉雲. 1990. 「社会变遷与西双版纳傣族婦女」『伝統与発展——雲南少数民族現代化研究之二』杜玉亭（編），475-486ページ所収. 中国社会科学出版社.
- . 1991. 「当代西双版纳傣族社会文化变遷研究」『社会学研究』1991-1:46-51.
- 中共西双版纳州委党史征研室. 1996. 「籌建西双版纳傣族自治区工作概述」『雲南边疆民族地区民主改革』中共雲南省委党史研究室（編），241-252ページ所収. 昆明：雲南大学出版社.

- 周域；李申文；和鴻昌（編）. 1991. 『雲南民族工作四十年研究』雲南人民出版社.
- 朱德普. 1993. 『历史研究』雲南人民出版社.
- _____. 1996. 『傣族神靈崇拜覓踪』雲南民族出版社.
- 朱衛平；刀新華. 1995. 「黎明之城景洪市」『地理知識』4:4-5.
- 張光平. 1994. 「瀾滄江——湄公河中国老撾緬甸泰国四国毗領地区国際經濟技術合作構想」『中国与東南
亜国家關係論叢』胡才；鄭良樹（編），108-118ページ所収. 雲南人民出版社.
- 張繼焦. 1996. 「“金四角”合作区的城市与区域發展」『都市人類学与边疆城市理論研究』李德洙（編），249-247
ページ所収. 北京：中国民航出版社.
- Wijeyewardene, Gehan. 1990. Thailand and the Tai: Version of Ethnic Identity. In *Ethnic Groups across
National Boundaries in Mainland Southeast Asia*, edited by G. Wijeyewardene, pp.48-73. Singapore:
ISEAS.
- Wu, David Y. H. 1989. Culture Change and Ethnic Identity among Minorities in China. In *Ethnicity & Ethnic
Groups in China*, edited by Chien Chiao and Nicholas. Tapp, pp.11-22. Hong Kong: The Chinese Uni-
versity of Hong Kong.